

短編集
「従妹」

明門亜

「従妹」

1歳違いの仲が良い従妹。

幼稚園児や小学校低学年位までは、ほぼ毎週のように一緒に遊んでいた。

中学へと学年が進み、逢う機会が減った後、

双方が年を経て、それぞれが結婚した。

彼女が私の結婚祝いに夫婦茶碗を送ってきてくれた際に、

ふと思い出した。

彼女が小学生の頃、叔母にいきなり

「いところ同士って結婚できるの？」

と俺の前で聞かれ、凄く照れくさかった記憶がよみがえった。

「25人の白雪姫」

むかーしむかし、外見は美しいけれども、心はひどく邪な女王が魔法の鏡に問い掛けました。
「鏡よ鏡。世界で最高に美しいのは誰だい？」

鏡は答えました「おりません。女王陛下」

女王は驚きつつ怒りました！

「こら！鏡！魔法の力があるのなら、ちゃんとマジメに答えなさい！
では美しい私は一体何番目だというのだ！」

鏡は答えました。

「26番目です。女王陛下」

女王はまた驚きつつ、あまりに中途半端な順位にも怒りました！

「こら！鏡！魔法の力があるのなら、ちゃんとマジメに答えなさい！
私の順位があるのなら1番目は一体誰だというのだ！」

鏡は答えました。

「白雪姫1号から白雪姫25号までが同得点でトップとなり1位で並んでおりますです。女王陛下。
そのため「最も」との形で個人を特定することができません。女王陛下。」

女王は鏡からの意外な報告に更に驚きました。

が、不服はあるものの理屈だけは通っているようです。

しかし、やはり其処は悪役です。

「よし。25人とも葬り去ってしまえば世界一は私だ！
(毒リンゴを25個も量産が必要なのが大変だが、ヤレヤレ・・・)」

そして鏡に聞きました

「鏡よ鏡。白雪姫1号から白雪姫25号までが、どこにいるのか教えておくれ」

鏡は答えました。

「白雪姫1号から白雪姫25号までは森の中で暮らしております。女王陛下。
ちなみにそれぞれが7人のドワーフ達とくらしており、
ドワーフの合計数は175人で中隊規模となります」

女王はまたまた驚きますが、やはり其処は悪役です。大勢のドワーフへの対策を考えます。

「では私の部下の狩人をドワーフどもに対抗させる為に送ろう。
ドワーフの倍の人数が勝つために必要とすれば・・・350人も狩人を集めるのか。ヤレヤレ。」

鏡が言いました。

「更に、おそれながら女王陛下。
美しい白雪姫1号から25号までの噂を聞きつけ求婚をしようとしている王子達がそれぞれに対して25名ずつおります。
そしてその625名の王子達の各国の兵力はトータルで申し上げますと・・・」

-- おしまい --

「空から女の子が降ってくる」

それは通学途中、突然だった。

夜更かしが祟った寝坊。

遅刻しないように、全力で道路を走り、道の角を急に曲がった僕は彼女を眼にした。

マンガのベタベタな演出にあるように、トーストを口にくわえたままで「遅刻、遅刻～」とか言うという、

恐ろしく器用なまねをしながら走っていたりはしなかったよ。

でも、かといって、その手のモノでは非常によくあるアリガちな風景でなくはなかった。

所謂 「落ちモノ」 って奴ですか。

いきなり、その娘が空から降って来たんだ。

最初は何が起きたのか解らなかったよ。

彼女は僕が走って行こうとしていた通学路を10数メートル上から、軽やかにゆっくりと降りて来た。

でも、不思議と違和感より別の感情が優先した。

「綺麗」だった。

というか、やや幼さを残した感じで可愛かった。

その後にやっと僕は「え？でも、何で・・・」という感じで立ち尽した。

僕以外には他には誰も見当たらない状態だったので、

まだ寢床の中でぬくぬくしながら夢を見ているのではない事を真っ先に心配した。

こんなお約束リアクションを俺はしなければいけないのか？と自問自答しながらも、

他にはすぐに確認する方法も思い当らなかったのも、仕方なくほっぺたをつねってみる。

うん、痛い・・・でも、もう少し加減して確かめれば良かったかと思いながらも、目は彼女から離さなかった。

僕が見守る中、彼女は地上に向かい更に緩やかに下降していった。

ワイヤーを使った手品？！

だってあんな高さへ人間はジャンプは出来ない事はおろか、ゆっくり下りてくる真似は自然にできよう筈は・・・

あー、「どっきり」って奴だ！カメラがきつと近くに・・・

心の中で合理的結論を自分なりに出した僕は、逆にこの随分と手間をかけた演出と、それに遭遇できた状況を楽しもうと、彼女の方に近づいていった。

だが、違った。

僕が見る限りでは、彼女は少なくとも肉眼で見える方法ではぶら下げられたり、下から支えられたりはしていなかった。

しかも、むしろ地面から1メートル程度の個所で浮き沈みを繰り返している。

思わず近づいてしげしげと確認を僕はした。

彼女は目を閉じていた。

寝てる？死んでる？

耳をすますと柔らかな息づかいが聞こえた。

女の子をこんなに近くでシミジミ観察したり、息づかいを聞いたりなんて経験は僕には初めてだった。

なんだろう。急に照れくさくなった。多分、顔は真っ赤になっていたに違いない。

「ふあ〜」

「！」

彼女が開口一番発したあくび。

声は穏やかなトーンで、これも可愛かった。

彼女は中空に浮きながら、「う～～ん」と伸びをすると、上半身のみ縦に起こした。

僕の方を見て「おはよう」と、さわやかな笑顔で言った。

呆然とする僕をよそに、寝ぼけ眼で「・・・あれ。・・・ここ・・・どこ。」と言い出す。

その後、彼女は左手首の内側を返して見た。

穏やかな感じが一変して驚愕の表情になると

「げ！ こんな時間！ あああ、遅刻だ～～～！」と大声をあげた。

そういうと。

そういうと彼女は去っていった。

空へ。

凄い速度で上昇して、

あっというまに見えなくなった。

それっきりだった。

世の中そんなもんさ。

カワイイ女の子とすれ違う事はたまにはあれど、

その先に進展するなんてことは更に滅多にないものさ。

その方が空から女の子が降ってくる事に比べれば、至極普通の展開さ。

そして多分、彼女と同じく、僕も遅刻した。